科学する心を育てる

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

さえずりに
耳を澄ます。

感じる・知りたい・また会いたい

自然に親しみ 大切にする心、続けていく優しさへ

社会福祉法人 照治福祉会

阿武山たつの子認定こども園

目次

1．はじめに　・・・1

(ア) 当園の教育・保育理念

(イ) 基本情報　保育時間とクラス構成、「集い」について

(ウ) 保育実践に取り組むにあたって　～今年度の園全体テーマに沿いながら～

2．「科学する心を育てる」についての考え方と、取り組みのテーマ　～共主体の保育の中で～

3．日々の保育から

実践事例１；身近な「音」に耳を澄ます、思いをはせる　・・・2

■　エピソード１　「集い」の喧噪に舞い込んできた鳥のさえずり

■　エピソード２　音を集める・振り返る

■　エピソード３　図鑑・QR コードで調べる・鳥の姿を確かめる　・・・3

■　エピソード４　もっと近くで聴きたい～近隣施設の駐車場へ～　・・・4

■　エピソード５　どうして鳥の声が少なくなったのか？　・・・5

➢　実践事例１　考察と課題　・・・6

実践事例２；身近な「生き物」に思いを寄せる

■　エピソード６　「かめじろうは女の子」

■　エピソード７　「ひとねのお泊り」　・・・7

➢　実践事例２　考察と課題　・・・9

実践事例３；身近な「命」を思う、続けていく優しさへ

■　エピソード８　「もうヤゴは飼わん方がいい」

■　エピソード９　カブトムシたちは、どうしたいのか？　・・・10

➢　実践事例３　考察と課題　・・・13

実践事例４；「聴く遊び」を楽しむ

エピソード 10　「セミの声当てゲーム」

➢　実践事例４　考察　・・・14

4.　保育実践を支えた職員の協力体制

5．今後の方向性　秋から冬、そしてこれから　・・・15

6．まとめ　科学する心 ”続けていく優しさ”について

7．最後に

さえずりに耳を澄ます。 感じる･知りたい･また会いたい

～　自然に親しみ　大切にする心、続けていく優しさへ　～

1.　はじめに

(ア)　当園の教育・保育理念　「ときめき ひらめき 輝いて 生きる力を育もう！」

子どもが自分でやりたいことを見つけ、創造力を働かせながらチャレンジする、実現して輝く、そんな子どもに育って欲しいと考え、日々子どもたちと関わり、環境づくりを行っている。

(イ)　基本情報　保育時間とクラス構成

月曜日～土曜日　７時～１９時（ 土曜日は１８時 ）					
担当保育制　乳児クラス			幼児異年齢クラス　３歳；ほし　４歳；つき　５歳；たつ		
０歳児；ゆき	１歳児；はな	２歳児；にじ	うさぎホーム	りすホーム	ぱんだホーム
１７名	２５名	３０名	３９名　（担任３名）	３６名	４１名

幼児クラスには「集い(つどい)」という時間がある。保育者が子どもたちに伝えたいこと、子どもがみんなに伝えたいことなどをお互いに共有し合う時間で、活動時に必ず設け、自分の思いを伝えること、相手の思いに耳を傾けることを大切にしている。

(ウ)　保育実践に取り組むにあたって　～今年度の園全体テーマに沿いながら～

今年度の園全体のテーマは「なぜ？に向き合う」である。

当園がソニーの論文執筆に取り組み始めて５年が経った。優秀園、奨励園にも選ばれ、その経験は現在も子どもの姿の読み取りや理解に活かされている。過去には、乳幼児全７クラスの事例を取り上げたり、毎月の職員研修会で事例検討を重ねたりもし、論文の執筆は園全体で力を注ぐプロジェクトであり、職員の学びの場でもあった。しかし同時に、コロナ禍を含む５年間は、園の体制や保育者に様々な変化をもたらす時間であった。

2023 年春、新しい保育者と共に、子ども一人一人を大切にしながら保育に奮闘する日々の始まり。新年度準備に追われる保育者たちには、これまでのように論文執筆をプロジェクトとして推し進めることに、「できるか？」「なぜ？」という不安があったように思う。その中で、「論文を書きたい」とひとり手を挙げた私だが、まずは保育者たちの姿と今年度の園全体テーマを照らし合わせ、日々のあらゆる保育活動や環境構成、職員研修のやり方に対し、「これまで」と「今」を見つめなおし、「なぜ？」と問いかけ真摯に向き合っていく必要があると考えた。そして、「科学する心を育む」保育実践の過程でも、同じ視点を持って取り組むことで、この論文が私一人のものではなく、園全体が「なぜ？に向き合う」「科学する心について考える」きっかけになるのではないかと考えた。これまでの実績や「科学する心を育てる」についての考え方にとらわれ過ぎず、今目の前にいる子どもたちの姿や取り巻く環境、保育者の関わり方など、出来るだけ多くの場面で「なぜ？」に向き合い、一つでも多くの「なるほど」「いいね」を積み重ねた実践論文にしたいと考えた。実際は、私が担任となったうさぎホームの事例を取り上げ、担任間で「なぜ？」に向き合い、試行錯誤した約４か月の活動と、子どもたちが「科学する心」を育む姿を捉えていきたい。

2.　「科学する心を育てる」についての考え方と、取り組みのテーマ　～共主体の保育の中で～

園の理念に照らし「子どもの心が動かされ、ときめきひらめく瞬間」の一つひとつが「科学する心」に繋がるとしたうえで、取り組みのテーマを「感じる･知りたい･また会いたい～続けていく優しさへ～」とした。具体的には、身近な自然に対して自身の感覚を一心に働かせて何かを感じる、興味関心を持ってもっと知ろうとする、自分なりに親しみや思いやりを持ち、命を大切にしようと思いをめぐらせ行動する、またいつか会いたいと願う（**続けていく優しさ**）。そのような心を「科学する心」として育んでいきたいと考えた。また当園では、**共主体の保育**を目指している。子どもの心は、時に思い通りに行かなかったり、ふいに関心を失ったり、別の刺激に影響され思いが途切れたりすることもある。私たち保育者は、子どもの心が揺らいだ時、拠り所になる土台として、「信頼関係・愛着・大切にされている実感」を、日々の関わりの中で築くことが重要だと考えている。執筆にあたり、「共主体の保育の中で科学する心を育む」とはどういうことか？以下のように考えた。まず、保育者も子どもと一緒に感じる心を磨き、「科学する心のタネ」に芽生えのきっかけをもたらすような事象に気づく。保育者も興味・意欲・探究心を抱いて行動する主体性を持つ。その芽を育てる栄養として、知恵を絞って環境を作り、失敗を恐れずやってみる。常に子どもと一緒に、遊ぶ、学ぶ、考える体験を積み重ね、その中で何かを感じ、共に喜び次につなげる、それが子どもたちの「科学する心」を大きく育む「共主体の保育」ではないか。この論文では、子どもが主体性を持って「自然に親しみ、不思議さや美しさに感動する心」「生き物に親しみ、様々な命の大切さに思いをめぐらせ、共生と持続を願う心」を育む姿に焦点を当てると同時に、共主体である保育者の、思いや不安、葛藤、気づき、工夫も合わせ、実践の過程を記すことにする。

※「科学する心を育てる」についての図は、後の実践事例・考察で表示

３．　日々の保育から

文頭の印について；　●具体的な子どもの姿の報告／◎保育者の工夫・関わり／◆各エピソードの考察

実践事例内の「保育者」の明記について；

うさぎホーム担任…保育者＝私（執筆者）、保育者②、保育者③

実践事例１；身近な「音」に耳を澄ます、思いをはせる

〖エピソード１「集い」の喧噪に舞い込んできた鳥のさえずり〗2023 年４月

●新年度のスタート。乳児クラスから３・４・５歳異年齢幼児クラスに進級した３歳児には、不安で大泣きしたり好きな遊びを見つけられなかったりする子どもが多かった。自分の遊びに夢中で園庭に出るための用意ができない４歳児、年下の友だちの世話をしたい気持ちがあっても上手くいかない５歳児、対応に追われる保育者たちで騒然としており、「朝の集い」がなかなか始められずにいた。何とか集いの場に全員揃ったものの、保育者が声を掛けても耳に入らず、後ろを向く、隣とおしゃべりする、立ち歩く、泣く子どもがいる。

保育室は２階にあり、敷地に隣接する林に程近い。保育者が「あ、なんか聞こえたよ。」と言って椅子から立ち後ろの窓を開けると、子どもたちは何かな？と静まって外を見た。鳥の鳴き声が一瞬聞こえた。「聞こえたー！」「鳥や！」「(立ち上がる子どもで前が）見えない！」「みんな静かにして！」「シイタケしー！」と騒ぐ子どもたちの声で、再び鳥の声は聞こえなくなり、保育者は窓を閉めた。「もう一回開けるね。いくよ…」といって窓を開け、耳を澄ます。子どもたちも保育者を真似て手を耳に当て静かになった。すると、シジュウカラのさえずりが確かに聞こえた。目を丸くしてしばらく聞き入る子どもたち。

◎保育者の工夫【保育室の良さを伝える】「うさぎホームは、お部屋が２階で鳥さんに近いから声がよく聞こえるね、嬉しいわ。」と話す。

●子どもたちは自分たちが褒められたようで照れくさいような嬉しいような表情を見せた。普段はそれぞれが口々に声を上げ再び騒がしくなる場面だが、この時はシジュウカラのさえずりがまだ聞こえていた。その後、今日の活動について簡単に話し、集いを終えて園庭遊びへと向かった。

◆考察　４月、期待と不安、やりたい気持ちと出来ないもどかしさが溢れる子どもと保育者からは、何とかしようと懸命に声が上がる。その音にお互いかき消されかえって何も伝わらない、何もかもが思い通りにならない時期だ。しかし、一瞬「待つ」「耳を澄ます」ことで、身の周りの出来事が心にすっと入り込んできて、その面白さに気付くことが出来た。視覚の刺激や思いを表す声に埋もれていた「聴く」という感覚、子どもたちが持つ「感じる心」に保育者が気付くきっかけであり、クラスが一緒に「いいね！」と感じた最初の経験であった。

◎【声の大きさボード；視覚と聴覚をつなげる】今やりたいことや関心を持っていることがある時に、保育者の言葉掛けだけで、集いでの話を聞いたり見通しをもって行動したりするのは、子どもたちにとって簡単ではない。鳥の鳴き声に耳を澄ませたことと、視覚を利用することを組み合わせて、声の大きさボードを手作りした。効果音 CD から鳥、猫、犬、ライオンの声を子どもたちに聞かせながら、写真とその音量を一致させて考えられるようにした。

●園庭でアリがしゃべるのは聞いたことがないということに気付いた子どもたち。大事な話をしたいが騒がしい時、保育者がアリの写真を指さしてしばらく様子を見ていると、気づいた子どもから次第に口を閉じて保育者を注目する姿が見られるようになった。

〖エピソード２　音を集める・振り返る〗　５・６月

●鳥のさえずりに興味を持った子どもたち。園庭で木の上に鳥を探し、鳴き声に耳を澄ませたり、散歩中に電線にキジバトを見つけ、帰り道でもまだいたことを喜んだり、ふと立ち止まって空を見上げる姿が見られるようになった。保育者に「昨日鳥がないてた！」「公園におったで」「羽根ひろった」の報告を数多く寄せるようになった。

◎【羽根のコレクション】子どもたちが集めた羽根は、保育者が消毒して保育室に掲示した。

◎【IC レコーダー】保育者は、聞こえた音を集めたり聞き直したりできるよう、ＩＣレコーダーで鳥の声を録音することを提案した。地域にある高槻市自然博物館あくあぴあ芥川より出版されている「高槻の野鳥ハンドブック」で身近な鳥が調べられること、「日本の野鳥」QR コードから、鳴き声をスマホで聴いて確かめられることも提案。

●子どもたちはすぐに「やりたい！」と声を上げた。その後、自分の好きな遊びを楽しみながらも、園庭遊びの合間や給食の後、外遊びに向かうまでの時間などに、鳥の鳴き声を耳にすると「先生、ＩＣレコーダー貸して！」と言って音のする方に録音機を向けるようになった。

●ある日の集いで録音したものを聴き直した。ワクワクしてじっと耳を澄ますこどもたち。しかし結果は、想像した音と違ってがっかりした様子だった。再生した音は、自分たちの「やりたい！」「聴こえたでー」「かして、やらせて！」という声や、別の遊びをしている友だちの声が主で、鳥の声は遠い。この振り返りをきっかけに、子どもたちからは次第に、ボタンを押している間は口を閉じ、表情や身振り手振りで気持ちを表す姿が見られるようになった。また鳥の声だけでなく、強い風の音、大雨の音に気づき、テラスに出たり、レインコートを着たりして音集めに意欲を見せた。

◎【雷の音】落雷すると危ないため、保育者はＩＣレコーダーをラップで包んでテラスに置き１時間ほど放置して音を集めた。

◆考察　遊びや生活の中で当たり前に聞こえていた自然音に気づき、興味・関心を寄せる子どもたち。その姿からは「聴く」という感覚の深まりが感じられた。良く聞くためには、驚きや喜びといった自分の気持ちを一度胸にとどめ「待つ・我慢する」ことが必要だ。その間、「何の音？」「どこから？」「強さ弱さ」「高さ低さ」に思いをはせているように感じられた。

　普段保育の中で私たちは、「視覚」を利用し活動内容や見通しを伝える事が多々ある。それは人が、反応や思考の多くを視覚に頼っているからだ。同時に、「見る」ことで他の感覚はあまり働かせずに済む、もしくは目から飛び込んでくる情報に邪魔されていると言えるのではないか？子どもたちが自然音に魅力を感じて関心を持ち、目には見えない音に思いを寄せじっと耳を澄ます姿を見て、「見る」に押されていた「聴く」という感覚を、自ら育んでいるように思った。

◆考察　「大人の持っている機械を自分で手に持ちボタンを押す」という行為に強い魅力を感じる子どもたちの間には、当然取り合いや順番争いが起こった。しかし録音した音を再生すると、自分たちの声ばかりで、録りたかった音はかき消されている。失敗を経て、譲り合ったり、順番を待ったりしながら、友だちと一緒に息をひそめ目を見合わせ、思いを伝え合おうとする。その姿に、共に遊ぶ・学ぶ・共感する心を感じた。

〖エピソード３　図鑑・ＱＲコードで調べる・鳥の姿を確かめる〗５月１１日

◎【テーブル・図鑑・スピーカー・スマホを用意】子どもたちは園庭で遊びながら、保育者と一緒にスズメやカラスなど、知っている鳥の鳴き声を聞きなおしていた。

●すると、フェンス外の松の木の上に、一羽の鳥が止まり鳴き出した。**Ａ児５歳（以下Ａ・５）**「ハトちゃう？」（ドバト、キジバトの QR コードで調べてみる）
Ａ・５「これじゃないなぁ…、こっちかなぁ？」（ヒヨドリの QR コードを読み取り調べる）「これや！ヒヨドリや。みんな、あれヒヨドリやで！」近くにいた友だちに知らせ、オープンスペースの中央まで近寄った。これまでなら、ヒヨドリに「おーい！」と声を掛け、「どれ！？見えない！」など思い思いに大声をあげたりするところだ。しかしこの日は、そっと笑いながら友だちと目を見合わせ、一緒にさえずりに耳を澄ませ、じっと木の上を見上げている。鳥が驚いて飛んでいかないようにしているのだ。長い間ヒヨドリは木の上で鳴いていた。

◆考察　当園は自然に恵まれた環境にあり、スズメやカラス以外にもキジバト、メジロ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、イソヒヨドリ、ツバメなど、様々な野鳥が訪れる。しかしその鳴き声はささやかで、遊びに夢中になっている子どもや保育者の耳に当たり前に届くものではない。しかも野鳥は人の気配に敏感で素早く飛び立ってしまうため、子どもたちの興味もなかなか持続しない。

しかしこの日、木の上に留まるヒヨドリを見上げる子どもたちには、豊かな感覚の働き、好奇心や探究心、分かった喜びの共有、よく聞く・見る・知ることへの意欲、どうすればいいか思考する姿が見られた。

▼なぜ？に向き合う①　園庭の主役は誰？

木の上の野鳥と違い、ダンゴ虫やバッタやトカゲなどは捕まえて虫かごに入れ観察したり部屋で飼ったりすることができる。主体性を重視する当園では、子どもたちの「やりたい」という思いを尊重し援助している。その中で、茶碗にダンゴ虫やアリやヤゴを入れて蓋をし、棚に放置して死なせる、間違った餌でトカゲを育てようとして失敗する、観察した後興味が薄れ、死骸になっても気付かず放置する、といったことが何度もある。園庭の植物についても、ようやく咲いた花を一度に全部摘んだり、木が裸になるまで葉を集めたり、手ごろな枝を何本も折って剣に見立てたりする行為が繰り返し見られる。「かわいそう」「虫にも家や家族がある」「命は大事」「せっかく咲いたみんなのお花」「園長先生が買ってくれた木だから」「危ない」といった言葉を繰り返し掛けながら、「なぜ？命やものの大切さを子どもたちに上手く伝えられないのか？」と、私自身、自分をもどかしく思うことがあった。**「主役は自分たち。やりたいことを何でもやってもいい自分たちの園庭」**という心が子どもたちにあるのならば、共に主体を持つ保育者の私は、「園庭は、色々な動植物が暮らす自然環境の一部分。自分たちもその中の一員として遊んでいる」という心で、子どもたちと向き合っていきたいと考えた。もちろん簡単なことではない。「見たい・触りたい・集めたい」という子どもたちのごく自然な好奇心に寄り添うことも大切だ。そのうえで、一羽の鳥に興味・関心を持って調べ、黙ってじっと見守りその声を聞く子どもたちの姿は、同じ自然環境に在る生き物として共生する姿だと嬉しく思う。これからも遊びの中で、命を感じ、親しみを持ち、出会いを喜ぶ心を、子どもたちと一緒に育んでいきたいと思う。

〖エピソード４　もっと近くで聴きたい～近隣施設の駐車場へ～〗６月 27 日

●IC レコーダーに集めた音を聞くと、保育室で遊ぶ友だちの声、乳児クラスの赤ちゃんの泣き声、隣の小学校のチャイムや放送の音、そして録音機を持つ自分の手の音など、記録しようとした音以外の雑音が、思いのほか入っていることが分かった。鳥の声が聞こえて「今だ！」と思ってスイッチを押した時と違って、再生された音にピンとこない表情を浮かべる子どもたち。どうしたらいいか保育者がたずねると、「(指さして）あっち！」「お山に行ったらいい」とのこと。鳥がいる林は近隣施設の敷地である。管理している方に聞くと、林の中はスズメバチやヤマヒルがいて危険なので入れないが、その向こうの駐車場ならどうぞ来てください、と言ってくれた。

うさぎホーム全員で、徒歩 10 分の駐車場に向かった。そしてその日は、10 時より施設の方々が大勢集まり集会を行っているとのことだった。

◎【声掛け】保育者②は子どもたちに、「あの建物でも"集い"をしているから、静かにしよう」「鳥の声をよく聞くためにアリになろうね」と話し、声の大きさボードを見せた。3，4，5 歳に分かれ、どこからどんな音が聞こえるか耳を澄ませ、聞こえた音を書きとめた。

●隣の小学校のプール指導の音が聞こえたり、緊張感がゆるんだ子どもたちが走り回ったりしたものの、ヒヨドリやスズメの鳴き声や、木から木へ飛び移る野鳥の姿を見ることができた。

近隣施設で子どもたちが聞いた音・気づいたこと・思ったこと

３歳；	ちゅーんちゅん・ぴよぴっぴよぴっ・ちりんちりん・たらんたらん（さんたさんみたいなおと）・とりさんおうちかえった・おへやさがしてる・もりのなかにはいった・きにとまった
４歳；	ちゅちゅちゅ・かーかー・きーきー・ぴーぴー・ちょんちょんちょん・きゅんきゅん・ちーちー・ひこうきのおと・ぷーるのみずのおと・ふえ
５歳；	ちゅうちゅう・ぴーぴーぴー・きいきい・かあかあ・ぴいぴい・ひとのこえ・ぴぃ！っていうふえのおと・ばさばさ・とりとんでた・うれしかった・いろんなおとしてたのしかった・はじめてのとこにいった・わくわくした

３歳児 ほしぐみ

4歳児 つきぐみ

5歳児 たつぐみ

◆考察　学年別に聞き取りをしたことで、子どもたちに、言葉での表現力が育っていることに気付いた。駐車場に実際行くまでに、私が指導案を立て共有したが、担任３人とも子どもたちの姿が予想できなかった。しかし子どもたちの様子や言葉からは、行ったことがない場所へ足を踏み入れるワクワク感、友だちと一緒に目の前の林からどんな音が聞こえるかと耳を澄ませる意欲、施設が快く場所を提供してくれたことへの感謝、大きな施設の中で「集い」をしているからそっと移動しようする想像力など、普段の園庭遊びにはない経験ができたように感じた。

▼なぜ？に向き合う②　**担任保育者の不安**　この日まで、園外に出るといえば慣れ親しんだ公園に３、４回散歩に行った経験しかなかった今年のうさぎホーム。果たして初めての場所に行き、鳥の声を聴くことを楽しんで帰って来られるのか？子どもたちはどの程度興味を持てるのか？三か月経ちようやく落ち着いて好きな遊びを見つけられるようになった３歳児を、わざわざ連れていく必要があるのか？もっと好きな遊びをじっくりさせてあげる方がいいのではないか？大人主導の活動ではないか？ という、担任の葛藤があった。結果として、暑さの中全員無事に帰って来たものの、活動を企画した私も、他の担任２人の不安を解消できるような答えを出すことが出来ず、「なぜ？」は３人の胸に残り、今後の活動の方向性が不透明となった。この後、プール遊びの始まりで日課が大きく変わり、クラスの取り組みとして鳥の声を聞くことは一時休止となった。

・・・なぜに向き合う⑤（P14）に続く

【エピソード５　どうして鳥の声が少なくなったのか？】 ７月 10 日

●さかんだった鳥のさえずりが少なくなり、少しずつ蝉の声が聞こえるようになった。集いで、窓の外に耳を澄ませると、“春にはよく聞こえていた鳥の声はあまり聞こえない”と気付く子どもたち。

◎【声掛け】保育者から、「どうしてかな？図鑑で調べたりお家の人に聞いたりして、何か分かったら教えてくれる？」と話した。

●子どもたちは、「いいよー！」と声をあげた。翌日の集いで、家で調べてきたＢ・３が、「わたりどり。」と発表した。その後、園に来るときカラスを見たこと、パン屋さんの入口にツバメの巣が出来て赤ちゃんがいること、渡り鳥はちがう国から飛んでくる鳥で春はいたけど今はいないことなど、子どもたちが思い思いに考えを発表する姿が見られた。

「鳥の声が少なくなったのはどうしてか？」　子どもたちの言葉
７月 10 日；あさだから・なつになった・せみがふえたから（C・5）／つゆになったから・おおあめでようすをみてる（D・5）／たまごがいっぱいでせまくなってひっこした・たまごのおせわでいそがしい（E・5） ７月 11 日；わたりどり（B・3） ８月７日；ちがうやまにひっこした（F・5）／いまがはるぐらいのちがうくににいってる（G・5） あつすぎてすからでない（H・5）／ほかのとりとなかまになっておひっこししていっしょにすんでる（C・5）

●「鳥の声が少なくなった理由」について、「子どもたちの考え」

⌘　梅雨の時期に何日か大雨が続いた→鳥も様子を見て鳴かずいる。
⌘　だんだん暑くなって夏が近づいてきた→鳥も鳴くのをやめている。
⌘　園庭でかすかにセミが鳴き始めたのに気付いた→セミの代わりに鳥は鳴かなくなった。
⌘　鳴かないで何かに忙しくしている→巣を作っている、卵を産んでいる、赤ちゃんの世話をしている
⌘　違う所に行って今はいない→今季節が「春」の外国に行っている。

◆考察　子どもたちの言葉には、今は姿も声もあまり見られない鳥に対して、森や海の向こうまで、様々に思いをはせている発想があった。梅雨の時期は外に行けず室内で過ごすことや、家族や友だちと一緒に遊び生活していること、笑ったり泣いたり喜んだり色々な感情があることなど、自分たちの毎日の暮らしや気持ちに照らして考えていた。

「渡り鳥、また来るかな？」とたずねると、うなずきながら「またきてほしい」とつぶやくＢ・３に、鳥への親しみや思いやりの心を感じた。

実践事例Ⅰ　考察と課題

今年度、論文にまとめる保育実践をするにあたって、園長はじめ私たち保育者には願いがあった。「子どもたちに心がふるえるような感動体験をしてほしい」というものだ。当初はそのために、何か大きな刺激や挑戦が必要だと私は思っていた。しかし、実践事例Ⅰを通して気付いたことがある。いくらすぐそばで奇跡的な事象が起きても、感じる心が育っていなければ気付くことすらないのだ。そして、子どもたちにその心はすでにあり、友だちや保育者と一緒に、少し立ち止まり耳を澄ませ待った時、初めて感動は周りの自然環境や事象から飛び込んでくるのだ。この「感じる心」が源となり、様々な出来事に心をふるわせる、興味・関心を持つ、もっと感じたいと意欲を持つ、どうなっているか知りたいと探究する、きっとこうかな？と思いをめぐらせる。その積み重ねと広がりが、感動をくれた生き物や自然、環境、命に対して、「親しみ」や「愛しさ」を抱き、「また会おう」「大切にしよう」、つまり「続けていく優しさ ＝ 科学する心」が育まれるのだと考えた。共主体の保育において、この心が育まれる過程に私たち保育者の、自然・環境・命への向き合い方が大きく影響することを意識し、保育者もまた、感じる心を日々磨き、子どもたちと一緒に、耳を澄ませていきたい。

昨年度当園では、教育・保育理念に照らして、まず子どもたちが何かに「興味・関心（K）」を持ち、そこから「意欲（I）」が生まれ、さらにその意欲が膨らんで「探究心（T）」に繋がり、ときめき・ひらめき・輝きにつながるという流れを、「KITサイクル(キットサイクル)」と名付け、子どもたちの姿を捉えてきた。

図；「科学する心」が育まれる過程

今年度の実践事例の中でも、科学する心が育まれる過程に、このKITサイクルは大きな力を与えている。

実践事例２；身近な「生き物」に思いを寄せる

〖エピソード６　「かめじろうは女の子」〗　５月２３日

●うさぎホームには、10年以上飼っている亀がいて、かめじろうという名前である。

◎【ケースの移動】４月、新しくうさぎホームの担任となった保育者は、ケースを大きいものに代え保育室の中に置き、子どもたちと一緒に餌やりや水替えをこまめに行った。

●活発に動き回るかめじろうに愛着と興味を寄せる子どもたち。次第に「かめじろうって、どこから来たん？」「だれが見つけたん？」「何歳？」と、保育者に聞くようになった。

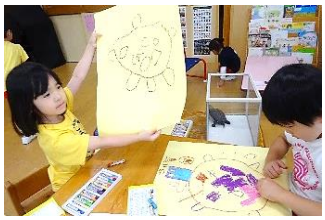
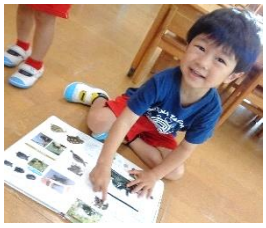
◎【「今日は何の日？366日」を読む】朝の集いで保育者②が、今日（５月２３日）は「世界亀の日」であることを話した。

●「えー！？かめのひ！？」と驚き面白がって、かめじろうへの関心が一気に高まり、かめじろうについての詳しい話をうさぎホーム担任経験がある保育者に聞きに行くことになった。

◎【真相の追求】聞かれた保育者は、自分が担任をする前からかめじろうはいたことに加え、それ以前の記憶をたどり、姉妹園に転勤した当時の担任保育者に電話で確認し、昼の集いで知らせてくれた。

“ かめじろう ” について分かったこと		
発見時のかめじろう	「かめの飼い方・育て方」で調べたこと	身体測定の結果
・発見は10年前（２０１３年） ・園庭のビオトープ付近にいた ・当時の大きさ６㎝ ・性別不明	・種類；クサガメ ・性別；メス(首に黄色い縞模様がある)	・身長（口からしっぽの先まで）；２４㎝・前足３㎝・後ろ足３㎝・しっぽ３㎝・甲羅の長さ18㎝・甲羅の幅11㎝・首の長さ３㎝ ・体重；４０３グラム ・お腹周り；２５センチ

●年長の５歳児たつぐみが生まれるずっと前から生きていたことに驚く子どもたち。
◎【発見時の実際の大きさを見せる】保育者②が紙を６センチの円に切って見せた。
●「ちっちゃ！」と驚きの声が上がった。もっと詳しく知りたいと言う子どもたち。
◎【声掛け】保育者②が、「どの本に載ってるかな？」と聞いた。
●「かめの飼い方・育て方」という本を取り出すＪ・５。開いて調べるとかめじろうは、クサガメの中でもメスであった。Ｉ・５は「女の子やのにかめじろうなんて、かわいそうやん！」と声を上げ、悲しい表情を浮かべた。

６月 19 日「今のかめじろうの大きさは？」という疑問から、子どもたちと保育者は一緒に身体測定を行った。その周りでは、かめじろうを見ながら何枚も絵を描いたり、図鑑や飼育本のクサガメが載っているページを開いたりする姿も見られた。

◆考察　一時はかめじろうへの関心が薄れていた子どもたちだが、保育者と共に毎日掃除と餌やりをして親しみを寄せることで、もっと知りたいと思う気持ちや、10 年前から生きていたこと、今と比べとても小さかったということ、実はメスだったということにとても驚いた様子だった。そして、**女の子にかめじろうという名前はかわいそうだ**と、かめじろうに対し感情移入していた。その後も、「かめじろう、キュウリ美味しいって！」と嬉しそうに様子を表現したり、以前はこわがっていた３歳児が掃除のときかめじろうを手で持てるようになったり、それに５歳児が「すごい、やったね！」と拍手したり、性別や名前を知って自分だったらと気持ちを想像したりする、様々な心が感じられた。

〖エピソード７　ひとねのお泊り〗　７月 28 日（金）

●当園には、同法人の４つの姉妹園がある。その中の清水認定こども園（以下、清水園）でも亀を飼っていることが、会議などで訪れた時に見かけた職員の話から判明していた。また、清水園に勤めているうさぎホームの保護者から、「ひとね」という名前の亀であることを教えてもらった。（以下ひとね）
◎【実物を撮影】**７月 24 日（火）**保育者が研修のため清水園を訪問。ひとねの写真を撮らせてもらい、印刷して翌日の集いで子どもたちに見せた。
●保育者が「大きさはかめじろうと同じくらいだったよ。色は違ったかなぁ。」と伝えると、子どもたちから「何歳？」「どこで見つけたん？」「なんか黒いなぁ。」「黒いからオスや！」「首は？もようあった？」「先生、写真撮ってくれてありがとう」などの声が上がった。

７月 27 日（木）朝、保育者と一緒にかめじろうの水替えと餌やりをした後、ひとねの写真を見ながＩ・５とＣ・５が話していた。
Ｉ・５「ひとねちゃんやから、女の子ちゃう？」
Ｃ・５「けど、首にもようがなかったらオスやで。」
Ｉ・５「先生、また見に行って、写真撮ってきて。」

◎【事実確認を提案】保育者から「清水の園長先生に聞いてみようか？」と提案し、電話をかけて自分たちで聞くことになった。

電話でのやりとり	
阿武山たつの子認定こども園　Ｉ・５、Ｃ・５／　清水認定こども園園長（以下 清）	
Ｉ;「もしもし…かめじろうは、女の子やの。」 清;「こんにちは、そうなの。」 Ｉ;「かめさん、仲良くしたいの。お友だちしたいの。」 清;「？ だれと仲良くするのかな？」 Ｉ;「ひとねちゃんと。」 清;「そうかぁ、ひとねさんに聞いてみないとねぇ…。」 Ｃ;「首のもよう、黄色い線あるかどうかみて。オスかメスか、分からんから。」	清;「今見てみるね。（移動）動くからなぁ…模様かぁ…首引っ込めててちょっとよく見えないなぁ。昔からいるけど…ひとねだから、女の子じゃないかなぁ。」 Ｉ;「お泊り、いい？」 Ｃ;「本物が見たいから、たつの子にお泊りしてもいい？」 清;「えー！お泊り？どうしようかなぁ…ひとねさん、びっくりしないかぁ…。うーん、いいですよ！だれか先生に迎えに来てもらってくださいね。」 Ｉ・Ｃ;「ありがとう！！」

●電話を終え、本物のひとねに会えることにわくわくする子どもたち。会話が弾んだ。
Ｉ・５「オスかなぁメスかなぁ？」Ｃ・５「女の子やったらひとね**ちゃん**で、男の子やったらひとね**くん**やな！」Ｊ・５「来たら、かめじろうと一緒に入れような」Ｃ・５「もし男やったら、赤ちゃん生まれるかもしれへんな」Ｊ・５「まずは結婚やろ」保育者「ひとねさんの気持ちもあるからなぁ、分からへんよ。喧嘩するかも知れへんし」Ｉ・５「結婚して、卵産んで、赤ちゃん生まれるかな…うふふふ！」
◎【本物を見せる】夕方保育者が、子どもたちが園庭で遊んでいる間に清水園にひとねを迎えに行った。明後日、清水園は夏祭りで、夏季休暇中の園児が大勢来るため、明日には返すことになり、お泊りは一泊のみとなった。

●**7 月 28 日（金）**登園して大きなたらいの中にひとねを発見し、大興奮の子どもたち。この日は夏季休暇中の１号認定子どもの登園日でもあり「二人になってる！」と驚く子どももいた。
　Ｊ・５が、たらいにかめじろうを入れると、かめじろうはすぐにひとねの後を追い、甲羅の上に乗りかかる様子が見られた。Ｉ・５「かめじろうがひとねちゃん、気に入った！」Ｊ・５「チューしてる！けっこんや！」保育者「どうかなぁ…仲いいのかなぁ…？」Ｃ・５「（首の）模様ない！やっぱりオスや！」保育者も一緒に「亀の飼い方・育て方」の本で調べたが、ひとねはやはりオスであることが分かった。キャベツ、人参、キュウリをあげて、身体測定も行った。

“かめじろうとひとね”について分かったこと		
ひとねを「亀の飼い方・育て方」で調べると	**ひとねの身体測定**	**二人が出会った時の様子を見て想像したこと**
・全体的に黒く、甲羅の模様は目立たない ・首は黒く、かめじろうのような黄色の線がない →ひとねはオス	・甲羅の長さ 12 ㎝ ・お腹周り２７㎝ ・体重 417ｇ →ひとねのほうが大きい	・かめじろう（メス）のほうがひとね（オス）を追いかけている。 →かめじろうがひとねを気に入って仲良くしようとしている（？） →かめじろうが嫌がって怒っている（？）

●Ｉ・５「かめじろうが女でひとねが男って、反対や。」Ｃ・５「ひとねくんやな（笑）」
　夕方、園庭での合同保育になる時間となり、子どもたちはひとねに「バイバイ！」「お泊りしてくれてありがとう！」「元気でね」「また来てね」と声を掛けて別れ、保育者が清水園にひとねを送っていった。
　一連のやり取りの中で、保育者には、名前の雰囲気と性別が逆転している違和感が終始あり、大きい方がオスのひとねで、追いかけている方がメスのかめじろうで…などといった事実をいちいちややこしく感じていた。しかし、子どもたちにとっては、目の前で元気に動き回る亀は純粋に面白くて可愛らしく、男でも女でも「かめじろうはかめじろう」「ひとねはひとね」であり、名前の事も小さな笑い話に過ぎないようだった。その後も、他園のひとねはさておき、かめじろうについて、子どもたちに新しい名前を考えようとする気配はない。「またひとねちゃんに来て欲しい」というＩ・５に理由を聞くと、「とにかくかめじろうと結婚して欲しい。卵産んで赤ちゃん生まれて、かめさんいっぱいになって欲しいねん。」と自信満々に答えていた。

◆**考察**　かめじろうへの関心が深まったことから、姉妹園で飼っている亀に興味を持ち、電話をかけてお泊りを頼んだ子どもたち。かめじろうに友だちを会わせたい、二人に仲良くなって欲しい、という気持ちと、色や大きさ、性別などをもっと知りたい、本物を見たい、という強い好奇心があった。そして、目の前で二人が出会う様子を見たとき、初対面のドキドキ感、家族や友だちとの関わり、もし自分がそんな名前なら…などと、自分の思いと重ね合わせながら、**大きく心をふるわせていた。**また、「本当はどうなんだろう？」という疑問を、自分で解決した満足感や、分かったことを友だちに知らせようとする姿があった。そして、実際に目の前で追いかけっこしている亀たちを見た時、オスやメスの固定観念など抜きにそれぞれ、凄い、面白い、かわいい、良かった、といった思いを寄せていた。姉妹園の園長という存在を知り、緊張しながらも自分の言葉で気持ちを伝え、願いをかなえたことも、子どもたちにとって大きな経験となった。

▼なぜ？に向き合う③　10年経ってかめじろう・ひとねの性別に気づく

今回の事例で、かめじろうは女の子でひとねは男の子だったことが分かった。当園だけでなく清水園でも「なぜ？」10年以上、だれも疑問に思わなかったのだろうか？

私たち保育者は、子どもたちが自然に親しみ興味を深められるような環境を模索していくとともに、それをどのように提供し、子どもとの関わりのなかで共有し対話していくかを考える必要がある。今回保育者が、かめじろうのケースを部屋の中に引っ越したこと、保育者②が「今日は"世界亀の日"」と知らせたこと、「かめじろうって、（どの本の）どこに載ってるの？」と聞いたことは、子どもたちの探究心に火を点け、かめじろうの性別や種類、亀のオスとメスの違いを知るきっかけとなった。私たち保育者が、人やもの、「命」にどのように関わっているか？大切にしているか？子どもたちにどう伝えるか？ これらは、子どもたちが身近な人やもの、「命」を大切にする心を育む重要なきっかけとなることを認識していかなければならない。

実践事例２　考察と課題

ここでは、子どもたちが亀との関わりやその対話を通して、亀への思いを深めていることが分かった。友だちや保育者と一緒に、世話をしながら触り、餌をやり、その動きを観察することで、亀に親しみを持ち、感情移入し、思いやる。その過程では、思いを言葉で誰かに伝えたり、相手の話を受け止めたりしながら、共に遊び学ぶ意欲や、「命を大切にする」心を育んでいたと考える。かめじろうとひとねが園で生きてきた10年は、子どもたちが生きてきた時間の倍以上の長さだ。そして調べてみると、クサガメの平均寿命は30～40年の長きに渡るそうだ。これからの時間、かめじろうと子どもたちがどのように関わり、どんな心を育んでいくか。「命との共生、大切さ」を伝えていく時間はたっぷりあるようだが、私たち保育者の取り組み方次第であると考え、意識して取り組みたい。

実践事例３　身近な「命」を思う、続けていく優しさへ

〖エピソード８　もうヤゴは飼わん方がいい〗　６月２８日

●去年までの経験から、ビオトープにヤゴがいることを知っている４・５歳児が、捕まえた２匹のヤゴを部屋で飼いたいと言った。（5月12日）石の裏に付いていた赤虫と枝を入れ、保育室に置いて数日後（5月16日）、一匹が羽化してトンボになった。残念ながら片側の羽根が伸び切らず、園庭の垣根にとまらせたが上手く飛ぶことは出来なかった。すぐに羽化したことが嬉しかったＫ・４は「もう一回捕まえたい！」と話す。次は空に飛んでいくところを見ようと、再び５匹捕まえて、部屋に持ち込む。

◎【飼育ケースの改善】保育者は、前回は虫かごの蓋が邪魔になったのではないかと考え、ペットボトルを切って長い棒を立てた中で飼うことを提案し様子を見ることにする。

●ところが、餌の赤虫がなかなか見つからない。餌の無いまま１週間たち３匹が死んだ。その後２匹は静かに生きていたが、６月２８日、全部死んでしまった。集いで保育者が、みんなで餌を探したけれど見つからなかったこと、ヤゴが死んでしまったことを子どもたちに伝えた。

Ｋ・４「またやー！また死んだ。オレ餌探したのに、おらんかってん。」Ｌ・４「家の近くに赤虫いてるで。持って来るわ。」他の子どもたちも、「また飼いたい」「ビオトープでまたヤゴを捕まえる」など、思い思いに声をあげた。するとＧ・５が、集い担当の保育者の横に来て、何か言いたそうにじっと立っている。みんなでＧ・５の話を聞いた。**「あの…もうヤゴは飼わん方がいい」**保育者「なんでそう思うの？」Ｇ・５「…（長い沈黙）。」保育者「ヤゴが死んだから？」「（うなづく）」「また死ぬかも知れないから、もうヤゴは飼わない方がいいってこと？」Ｇ・５「…うん」と言って強くうなずいた。しん･･･となるうさぎホームの子どもたち。Ｇ・５の言葉に反対する者はいなかった。保育者は「なるほど…餌見つけるの、難しかったもんなぁ…。」と話した。

◆考察　ヤゴの１匹がトンボになったことを大喜びしたうさぎホームだったが、大半の子どもに、トンボにならず死んだヤゴがいたという意識は無かった。ましてや羽化したトンボが上手く飛べなかった事をあまり気に留めておらず、新たに飼うことにしたヤゴがなかなかトンボにならないのを見ながら関心が薄れ、「トンボにはなりそうもない」とあきらめていた。しかしＧ・５は、死んだヤゴのことを覚えていて、毎日ペットボトルの中のヤゴを観察していた。その様子に、ヤゴの命を大切に思う心が感じられた。

◆考察　幼虫が蛹になり、チョウやトンボやカブトムシになって登場する様は、子どもや保育者にとって不思議で美しく感動的である。しかし、羽化の際のちょっとしたハプニングで羽が曲がり飛べなかったり、羽化もできずに死んだりするものもある。命の難しさや、生きられなかったものの存在に目を向けているＧ・５の姿には、生き物に親しみ思いを寄せ、「生きて欲しい」と願う心が感じられた。この事例を通して、命の美しさや感動とともに、一匹の幼生が無事トンボになって飛んでいくことは、ものすごい「奇跡」なのだと私たち保育者も知り、子どもたちと一緒に生き物との関わりかたを考えていく必要があると感じた。

〖エピソード９　カブトムシたちは、どうしたいのか？〗７月・８月

●**2022 年７月**、保護者より大きな衣装ケースに入れたカブトムシをたくさんいただいた。玄関に置くと、子どもたちは夢中になり、ふたを開けては観察したり掴んだり、昆虫ゼリーを与えたりして親しんだ。秋が深まり、成虫は死んでしまったが、土の中に幼虫がたくさんいたため、ある保育者が３つの飼育ケースに昆虫マットを入れて幼虫を移し、来年の夏まで保管していた。

2023 年６月、ケースの中に大きな幼虫の姿が見られ、７月ついに立派なカブトムシが土の上に現れた。生まれたものは再び衣装ケースに移され、玄関の子どもたちが触れる場所に置かれた。当然のことながら、人間がケースの中で飼育したカブトムシには天敵もなく、去年をはるかに超える数となった。昆虫ゼリーが次々入れられ、それを食べてケースの中でうごめくカブトムシ。子どもたちは、棒でつついたり、ケースから出し入れしたり、２匹を戦わせたりして遊んでいる。

◎【疑問を持ち行動する】保育者は、その様子をそばで見守りながら「これでいいのか？」「人間が全部お膳立てしたケースの中で生きる様子を見せていいのか？」「″カブトムシの餌=昆虫ゼリー″だと、子どもが思っていいのか？」「この調子でもう一年育てたら、来年は一体何匹になるのだろう？」という疑問を持った。それでも、一度に全て逃がしてしまうと子どもたちががっかりするだろうと考え、少しずつ園庭に逃がして数を減らしたり、昆虫ゼリーではなく砂糖水を与えたりした。

●７月も半ばを過ぎると、生きているカブトムシもいるが、命を終えたものは体がバラバラになり、ケースにはコバエが舞っている。砂糖水にアリも集まってきている。

◎【問いかけ】**７月２４日（月）７：３０**　朝玄関で合同保育をしている時、保育者は、衣装ケースの蓋を開け、子どもたちと一緒にカブトムシを見ることにした。死骸が３つと、エサ入れの下に動いているカブトムシが見える。「カブトムシ、なんで死んだんかなぁ？」と子どもたちにたずねた。

●Ｃ・５「餌がないからや。昆虫ゼリー入れたらいい」Ｊ・５「死んだやつは、おはかに埋めたらいい」
Ｈ・５「どうしたらいいの？」

◎【問いかけ】保育者は「この子たちは、去年もらったカブトムシの卵から生まれて、一回も空を飛んでないなぁ。もうずっとこのケースの中だけで、死ぬんかなぁ。本当のカブトムシのエサって、何かなぁ？」と、子どもたちに問いかけた。

●Ｊ・５「カブトムシのエサは昆虫ゼリー。あと、木のみつちゃうかなぁ。」
Ｃ・５「木の汁やな、あ、樹液や！」Ｈ・５「もうぜんぶ逃がす？でも、どこに逃がせばいいの？」Ｃ・５「園庭の畑は？畑やったら、クワガタの幼虫いるで。」保育者「この前じゃがいも掘った時みたいに、みんなが踏んだり掘り返したりするんとちがう？」Ｊ・５「(園庭の奥にある白いフェンスを指さして）あっこがいい。森に近いし。」

８：００　他の職員が出勤し、２階の保育室に移動する時間となったため、ケースに蓋をした。

９：４５　園庭に出る際、死んでいるカブトムシを園庭の奥に埋めることにした子どもたち。
テラスで衣装ケースを開けて死骸を取り出す。Ｈ・５「なんか臭い…」Ｉ・５「いっぱい死んでる…」
Ｆ・５「生きてるのもいてるで」Ｋ・４「死んでるやつ、ちょうだい！」Ｍ・５「アリがいっぱいいる！」

◎【声掛け】この日園庭遊びから戻った後保育者は、お墓に埋めた時の気持ちと、生きているカブトムシをどうすればいいか？子どもたちに聞いた。

●Ｍ・５「しんでるやつは、つのがとれてたで。つのとれちゃうの、ふえてきたなぁ。」
保育者「生きてるカブトムシは、お空を飛んだことあるのかなぁ？」Ｊ・５「あ、羽根を広げてるやつ、一匹見たことある！」保育者「羽根を広げたことないのもいるのかなぁ。」Ｈ・５「もう逃がした方がいいんじゃない？」Ｊ・５「カブトムシは土が好きやから、土に逃がしたら？」Ｇ・５「全部死ぬまであそこ（ケース）に入れとくんは、絶対いやや。逃がしたい。」

◎【声掛け】（保育者）「じゃあ、どうやって逃がしたらいい？」

●G・５（しばらく考え込んだ後）「朝は土に潜ってて、夜になったら出られるようにして、小さい虫かごに入れるねん。それで、土をかぶせたらどう？」子どもたちが「いいねぇ！」と賛成した。

子どもたちは保育者と一緒に園長に、死んだカブトムシを埋めたことの報告と、まだ生きているカブトムシを逃がしていいかを聞きにいった。園長「お墓に入れてくれたの？ありがとう。残りは逃がすの？全部？にじぐみ（2歳）さんとかはなぐみ（１歳）さんとか、毎日見てるからなぁ…。」それを聞いた子どもたちは、さすがに衣装ケースと３つの飼育ケース全部が空になってしまうと、毎日観察している友だちや、触るのを楽しんでいる赤ちゃんが淋しがると考え、衣装ケースのカブトムシだけ逃がすことにした。

●**7月26日（水）**室内遊びの際、廃材の菓子箱と段ボールを利用して「カブトムシの家」を作ることにした。G・５のアイデアで、壁は低く、一匹ずつの部屋に分かれており、壁に切り込みを入れてそれを倒せばバリアフリーになるようにした。O・５はじめC・５、H・5、M・５が、テープを切り、貼り合わせる。C・５は、残りの段ボールを２㎝ほどの四角に切り、「カブトムシのおもちゃ」として各部屋に入れた。

●**7月27日（木）11：00**　熱中症警戒アラートが出る中、短時間の約束で、衣装ケースのカブトムシ（オス×１、メス７）を土と一緒に手作りの家に入れ、園庭奥の桜の木の下に運んだ。（この時、土の中に白い卵がたくさん見つかる。小さなボウルに集め土をかぶせておいた。）その場所は、**①日陰になってる②裏の森に一番近い③桜の樹液を飲めるかもしれない**、という理由で、子どもたちが決めたものだ。運ぶ際、ガサゴソ出てくるもの、土の中に留まるもの、シャツを這い上がって肩に登ってくるもの…カブトムシそれぞれの行き先に一喜一憂する子どもたち。土から這い出して来るもののうち、炎天下に向かうものは急いで家に戻し土をかぶせる、フェンス向こうの森に向かうものは「そっち大丈夫！」と声を掛け、土の中に留まるものには「カブトムシ、今はそこがいいねんから、おいとこう！」と声を掛け合っていた。自分たちが熱中症になっては大変と、大急ぎで室内に戻った。

◎【その後の様子を見る】**12：30** 保育者は給食を終えたJ・５とG・５を誘い、そっと様子を見にいった。

●土の中に留まっていた３匹が、這い出して日に当たってひっくり返りじたばたしている。G・５「やばい！そこはあかんって。熱中症なる！森の方やって。せんせい、ぼく（手で）もたれへん！」K・５「俺がやるわ！」保育者「Gくん！スコップ持っておいで！」二人はフェンスの下にカブトムシを移動。カブトムシが森の方に向かいフェンスをくぐり、下の方の日陰まで行くと「あーよかった！」とほっとしていた。すごく暑いのと、５歳児の活動が始まるのとで、急いで入室した。

7月28日（金）プール遊びのため外に出ず。

7月29日（土）土曜保育に来ていたM・５と保育者が一緒に、家の中のカブトムシがいなくなっていることを確認した。

7月31日（月）M・５がうさぎホームのみんなに知らせ、その後園庭遊びに出た際、自分たちの目で無事にカブトムシがいなくなっていることを確認した。G・５は、家に入れた土の中を調べた後、桜の木の上を見上げ「良かった…全部いなくなってる。山に行ったか、木に登っていったか…、やなっ！」と満足そうにつぶやいた。

◎【幼虫の保護】**8月1日（水）**お盆休みが近づき家庭保育の子どもが増える中、子どもたちが集めた卵をどうしようか悩んだ保育者。ようやくカブトムシを山に帰せたのに、この卵を同じように育ててしまったら繰り返しになる…昆虫マットもたくさん買わないといけないし…やっぱり桜の木の下に埋めようと思いボウルから外に出すと、もうすでに孵化したたくさんの小さな幼虫がもそもそ動いていた。びっくりし慌ててボウルに戻した。

◎【飼育の準備】**8月3日（木）**保育者が幼児主幹の保育者に幼虫のことを話すと、「家に昆虫マット余ってるか

ら、持ってこようか？」と、提案してくれた。その時保育者に、**もう一年やるか!!」という意欲が湧いた。**木の下に卵を埋めたとしても、この猛暑では乾燥して全滅かも知れない。それも自然の道理だと一度は割り切ったが、小さなボウルの中で幼虫になり成長している様子に心が動いた。昆虫マットが足りなくなったら、保護者に余っているものの提供を呼び掛けてもいい、成虫になったら放してもいい。正解は分からないが、「環境に優しいサスティナブルなカブトムシの飼育」「卵から成虫までの大変身を子どもたちに見せる飼育」をやりたいと思った。家でカブトムシを飼っているＰ・５の保護者から、飼い方の Youtube チャンネルも教わったところだ。急いで情報収集し廃材のペットボトルで飼育ポットを作った。

◎【新たな飼育ケースへ】**８月４日（金）**保育者は子どもたちに幼虫を見せた。

●**「えー！あの卵がもう？すごい！」**と声があがった。残り３つのケースにも幼虫がいるかも知れないと、ひっくり返して調べた。すると、生きているメスのカブトムシが３匹と、幼虫もたくさん出てきた。成虫は、フェンスの向こうに逃がし、幼虫（１２匹）はペットボトルで作った飼育ケースに、もらった昆虫マットと一緒に一匹ずつ入れ、部屋で見守ることとなった。泥んこ遊びが得意なＢ・３が、器用に昆虫マットをペットボトルに詰めた。その後も、子どもたちと一緒に大事に育てながら見守っている。

◎【保護者への発信】保育者は、カブトムシ特別号のドキュメンテーションを作り、玄関に掲示した。

◆考察　元気だったカブトムシが弱って死んでいく様子を見て、まだ生きているものが、「何を食べたくてどこに行きたいのか？」ということに考えをめぐらせる子どもたち。カブトムシが自分で出られるようにと、壁が低くゲートを倒せば外に出られる「家」を友だちと一緒に作る場面では、発案者Ｇ・５の思いやアイデアに共感しながら、テープを切る・貼り合わせる・切り込みを入れる、などを協力しながら行った。また、Ｃ・５の「カブトムシが遊ぶおもちゃも入れたい」という思いにも「いいね！」と尊重する姿が見られた。そして、カブトムシに感情移入し、友だちと力を合わせて無事に帰そうと必死になる様子に、子どもたちが**大きく心をふるわせている**ことを感じた。

◆考察　この事例で保育者は、カブトムシの飼い方に疑問を持ち子どもたちと一緒に放したが、卵が幼虫になるという生き物の生命力の強さに驚き感動して、もう一年見守りたいと考えた。ペットボトルを大きくしたり、糞を掃除したり、新しい昆虫マットを入れたりしなくてはならないだろう。また、成虫となって出てくるとき今の５歳児は卒園している。それでもこれまでの経験から、異年齢保育の強みで、年長児の姿を見ていた年中、年少児たちが、自分たちがやる！と言って、カブトムシの「命」と向き合ってくれると信じている。そして、子どもたちが「命の大切さ」について考えられるかどうかは、私たち保育者の「命」との関わりが大きく影響することを忘れずにいたい。一年間大切に育て、子どもたちと一緒に、「続けていく優しさ」を持ちながら、「また会いたい」という願いをかなえ、共に喜びたいと思う。

◆考察　認定こども園である当園は、月曜日～土曜日、７時～19 時（土曜日は 18 時）まで保育を行っており、保育時間は子どもによって異なり職員の勤務体制も複雑である。幼児クラスでは、教育の機会が平等になるよう、１号認定こどもがいる時間に、行事に向けての取り組みやクラス活動の内容を決める集いを行っている。保育者は、「やりたい」と思って取り組む機会が、どの子も同じように持てることを常に意識している。この実践の中で、平等に機会を用意すべき保育者として、夏季自由保育期間に、生きているカブトムシを逃がしたり、無事いなくなったか見届けたり、幼虫を移したりする「機会」を、クラスの子どもたち全員で共有することの難しさを感じ、後で「やりたかった」と言う子がいるのではないか？と不安に思う葛藤があった。しかしながら、季節の移り変わりや命の営みが、園の予定やクラスの日課を待ってくれるはずがない、と思い直して、今この時間、目の前にいるカブトムシと、興味を持った子どもたちと一緒に向き合うことにした。そこで気づいたことは、子どもたちならではの大らかさや逞しさであった。朝一番にケースを見て、オスとメスが交尾していることを発見し

た子どもが、後で登園した友だちに知らせ、「すごっ！」と感心される。「(ケースの中で）全部死ぬのは絶対いややけど、にじぐみ（2歳）がびっくりするから、全部（逃がすの）はやめとこ。」と妥協点を見出す。金曜日に逃がしたカブトムシが翌日無事いなくなったことを、土曜保育に来ていた子どもが見届け、月曜日、友だちに伝える。土曜保育に来ている他クラスの子どもが、取り組みの話を聞いてイメージし、クラスの垣根を越え、興味を持って手助けしてくれる。その場に居合わせず、「やりたかった」という声が上がることもあるが、大人が思っているよりずっと、子どもたちには発信力があり、それを受け取る寛容さや、想像力を働かせて「そうなんや、良かった！」と共感する心があることが分かった。

土曜日;3･4歳の午睡中、幼虫の世話をする、ぱんだ･りすホームの５歳児

▼なぜに？向き合う④「なぜ？カブトムシを飼うのか？」

初めてカブトムシを見たとき、子どもたちはその大きさや動きに驚き、ドキドキしながら手を伸ばし、自分の手で持って喜んだり手から離れず泣いたりした。朝、保護者と別れて悲しい時、日中まだ遊びたくて移動したくない時、夕方何となく淋しいとき、保育者は「カブトムシ見よう」と声を掛け、子どもたちが気持ちを切り替え玄関のケースに向かって一歩踏み出すためのきっかけ作りをした。慣れた幼児になると、まるでおもちゃのようにもてあそぶ姿が見られ、保育者は「カブトムシは夜行性、今は休憩する時だからそっとしておいてね」と声を掛けた。次第に、死んでひっくり返りコバエが舞う、まだ生きて動いている様子にも飽きてきて、ケースの蓋が開けられることも減った。子どもたちは、「身近な生き物に興味や関心を持つ」ことはできたものの「親しみをもつ」「命を感じ、生命の尊さに気づく」経験ができたかどうか？保育者は「そうした気付きを促すような関わり」をしていただろうか？

カブトムシを観察して、「どうなっているんだろう？不思議だな」と思いながら手に取り、「さわれた、持てた」と楽しむことが、「興味や関心を持つ」ことだとすれば、「自分の羽で飛びたいだろうな」「樹液を吸いたいやろうな」「ケースの中で死ぬのは嫌やろうな」「行きたいところに行けたらいいな」という思いは、子どもたちが、生き物に感情移入して「命」を感じ、「親しみ」「大切にする」心だと考える。

これからも、子どもと同じ目線で「見たい、触りたい、餌をあげたい、飼いたい」というごく自然な好奇心と付き合いながら、同時にこの事例での経験を生かし、「生き物を飼う」ことでどんな「心」が育って欲しいのか？そのために保育者はどう関わっていくか？子どもたちと一緒に考えていきたい。

実践事例３　考察と課題

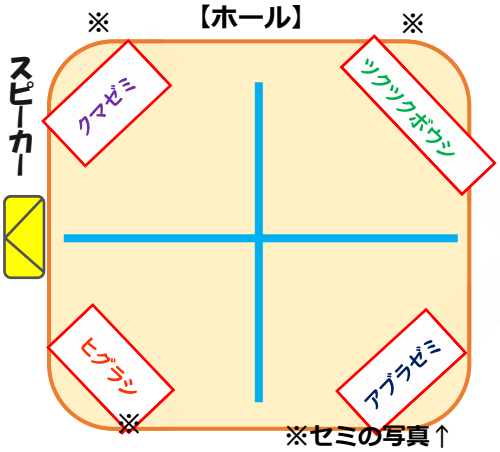
「ヤゴを飼わない・カブトムシを逃がす」という二つの実践は、生き物との関わりとして一見消極的と言えるかもしれない。しかし「面白い・手に入れたい・飼いたい」という欲求の「結末」に目を向け、生き物に思いを寄せて想像したこと、「共に生きるもの」として「どうしたいのか？」と思いをめぐらせ、友だちと一緒に行動したことは、子どもたちの主体的で積極的な姿であったと考える。そして、カブトムシが無事山に帰ったことを見届け、友だちと共に喜び合う姿に、「科学する心」の育ちを感じた。「命の大切さ」を、ただ理屈として言い聞かせるだけでは、子どもたちに自分事として伝わらないということは、これまでの経験から実感している。ならば私たち保育者は、子どもがその美しさや面白さ、不思議さを感じ、自分のことのように思いを寄せるにはどうすればよいか模索しながら、共生と持続を喜び合える自然との関わり方を、子どもたちと一緒に考え試行錯誤する必要があると考える。

実践事例４　「聴く遊び」を楽しむ

〖エピソード１０　セミの声当てゲーム〗　８月１１日

●夏本番、外は蝉しぐれが降り注いでいるが、熱中症警戒アラートの発令が続き、セミ捕りに園庭へ出ることがなかなか叶わなかった。集いで子どもたちに「室内でできるやりたいこと」を聞くと、運動遊具遊びや楽器遊びをはじめ、やりたいことがたくさん出た。

◎【企画・提案と環境設定】保育者も手をあげ、「聞いて GO！わかるかな？セミの声」という音当てゲームをやりたいと提案した。IC レコーダーで録音した４種類の蝉の声を編集。スピーカーで再生した音を聞き、これだと思ったセミの写真のところに移動する。
全問正解した者を、蝉の音に詳しい「ものしり博士」に認定する



こととした。

●難しいかな？興味を持ってくれるかな？との心配をよそに、問題の音が流れるとしん･･･と静かになって耳を澄ます子どもたち。自信がなかった子どももだんだん分かるようになり、５歳児が年下の子どもに「ヒグラシちゃうで、ツクツクボウシや…こっちこっち！」と優しく誘う姿も見られた。そして、保育者が正解の写真を見せると「よっしゃー！！」と声を上げガッツポーズして大喜びした。ゲームの終わりに、窓を開けて外の蝉しぐれをみんなで聴くと「…アブラゼミや！」と聞き当てることが出来た。その後、子どもたちが提案した椅子取りゲーム、じゃんけん列車をして遊んだ。

実践事例４　考察

友だちと一緒に、身体を動かしながら「聴く」ことに集中するゲームを通して、子どもたちが、身の回りの音への興味を深めたことが分かった。以前は、蝉の声といえば「ミーンミン」だと言っていたが、玄関や園庭、テラスで耳を澄ませ蝉の種類を当てる姿が見られるようになった。保育者が帰宅途中に園児とその母親に会うと、「今、聞こえる音が何のセミか、子どもに教わっていました。」とのこと。子どもたちの感じる力が高まり、思いを伝える力が育ったことを感じた。何より、猛暑で園庭に出て自由に虫捕りが出来ない状況の中、子どもたちが、どこかで鳴いているセミの声に耳を澄まして思いをめぐらせ、「分かった！」と喜ぶ姿を、嬉しく思った。

▼なぜ？に向き合う⑤　「なぜ？に向き合う②（P5）」のその後から学んだこと

うさぎホーム担任で活動を振り返る　８月 10 日

◎【保育者間の対話】論文にまとめる活動がひと段落し、ようやくお盆休みを迎えようとしていた。私が論文の進捗状況を報告しながら、一緒に頑張ってきた４カ月間の活動を３人で振り返った。

☆　「窓の外に耳を澄ます」ことは、単に集いで話に集中するための導入だけではなく、聴く力の育ちに繋がっていた。（保育者②）

☆　近隣施設へ鳥の声を聴きに行った時、子どもたちの興味や反応が予測できず不安だった。しかし想像以上に子どもたちは様々なことに気付いていた。今思えば、満足や成果を期待するあまり、「3 歳児には負担」「駐車場に行って聴くことは楽しいのか」「安全の確保はできるか」「思いのほか鳥の声がしなかった」といった、不安が先立っていた。小学校のプールの音を聞き、ヤマモモの実を拾い、スズメが一羽飛び立つところを見て、思い思いに楽しんでいた子どもたちの姿に、今では「行って良かったな」と思える。（保育者③）

☆　子どもたちの「たのしかった・わくわくした」という言葉から、私たち保育者も身の回りの出来事や身近な自然に興味関心を持ち、感性を磨いていくことが大切だと改めて思った。（保育者②・③）

☆　「活動の機会を平等に」という意識は大切。そのうえで、カブトムシの寿命やセミしぐれの季節といった自然の不思議や面白さも子どもたちに伝えたい。７時～19 時、月曜～土曜日まで保育をしている当園の強みを活かしながら、子どもたちの「想像力・伝え合う力」を信じて支えていきたい。（私）

☆　セミの声当てゲームでは、学びや成長が子どもたちの「楽しい遊び」の中にあると実感した。（3 人共通）

☆　声当てゲームの指導案を担任に見せた時、「楽しそう！鳥の声でもやりたいですね」と言い、率先して準備や片付けをしてくれたことがとても嬉しかった。保育者同士の連携の大切さを感じるとともに、「楽しかった！」「分かった！」と言う子どもたちの姿にもつながったと思う。（私）

◆考察　活動を一つ一つ振り返ると、私たち保育者も子どもたちのそばでじっと耳を澄ませたり、驚いたり喜んだりしながら心をふるわせていたことに気付いた。とりわけ子どもたちの思いもよらない言葉や、なるほどと感心するアイデア、誰に教わるでもない生き物への親しみに出会ったとき、驚いて嬉しくなり**大きく心がふるえた。**

これからも、子どもたちが不安や葛藤、挑戦や失敗、感動や気づきを積み重ねながら成長していくのと同じように、安心・安全を第一に、私たち保育者も、お互いを支え振り返り認め合いながら、失敗や成功、心ふるえる体験を糧に、共主体の保育を模索し続けていきたい。

４．保育実践を支えた職員の協力体制

★　定期的に、数名の決まったメンバーによる会議を開き、論文の問題点や方向性を検討し合った。

★　ドキュメンテーションや法人インスタグラムのため、当園の保育者はカメラを常備して子どもたちの姿に目を向けている。私が活動の中で「今、撮って欲しい！」と声を掛けると、誰でも快くシャッターを切り、共有フォルダに保存しておいてくれた。

★　うさぎホームの担任経験者が、かめじろうの生い立ちについて記憶をたどり、転勤した保育者にすぐ電話連絡してくれた。
★　ひとねのお泊りを電話で頼む際には、副園長や主幹保育者が、一緒にいる子どもたちにも分かるようにと電話をスピーカーフォンにし、やりとりの様子を撮影し、私が清水園に行くための調整をし、「明日、かめじろうとのご対面が楽しみやね！」と声を掛けてくれた。
★　私がカブトムシを再び飼うか悩んでいた時、家にあった昆虫マットを快く提供してくれた。
★　勤務時間中に私が論文を作成できるようにと、園全体で職員配置を調整して、うさぎホーム担任をはじめたくさんの保育者が保育のフォローに入ってくれ、子どもたちの安全と活動に責任を持ってくれた。

5．今後の方向性　秋から冬、そしてこれから

生き物たちの暮らしや命が続いていることや季節の移り変わりに目を向けると、活動の継続や発展、遊びのアイデアが湧いてくる。共主体の保育のもと、今後も担任間で連携しながら子どもたちと共に取り組んでいきたい。

- 「聞いて GO！分かるかな？音当てゲーム・鳥編」（シジュウカラ・ハシボソ/ハシブトガラス・イソヒヨドリ・ヒヨドリ・メジロ・キジバト他）鳥の声のものしり博士になる。
- 集めた羽根を観察する；自然博物館あくあぴあ芥川から剥製を借り、羽根の種類・役割を考える。
- 色々な散歩先で野鳥を観察・耳を澄ます。
- 渡り鳥を観察する。（ツバメ・ツグミ・キンクロハジロ・ホシハジロ・シメ他）
- 耳を澄ます時、どうして耳に手を当てるのか？よく聞くための工夫を考える。
- カブトムシの飼育・成長の観察（幼虫の成長、蛹室作り、蛹化、羽化）
- 保護者への発信（昆虫マットの募集、飼育の工夫エピソード聞き取り、成長過程のドキュメンテーション掲示、鳥のさえずり・蝉の鳴き声 QR コードの活用）
- ３月再び鳥のさえずりの季節、１年前と比べて関心や感覚の高まり、子どもたちの成長を捉える。

また、「音」を感じるだけでなく、「味わう」や「嗅ぐ」「触る」にも、子どもたちの感じる力を育む可能性を見出せるだろう。畑で育てた野菜や園庭に実る果樹の味、ハーブガーデンのローズマリーやミント、垣根のヘクソカズラや花壇のドクダミのにおい、落ち葉や木の実などの手触りなど、子どもたちの五感を働かせられるような遊びを模索する。そしてそれらは、「自然・環境・命」に親しみ、「知りたい、また会いたい」と願う「続けていく優しさ」を持てるような活動であることを意識しながら、環境作りに試行錯誤を重ねていきたい。

6．まとめ　科学する心“ 続けていく優しさ ”について

身近な自然や生き物と関わるなかで子どもたちは、何かに興味を抱き、その思いを一度心にとどめてじっと待ち、耳を澄ませ目を凝らしながら、自分自身の**「感じる心」をふるわせていた。**そして友だちや保育者と一緒に、思いを伝え分かち合い、関心を持ったことに対してもっと知りたいと探究心を持って行動する姿が見られた。さらに、親しみを持った生き物に感情移入しながら大切に思い、また会いたいという、命を続けるための優しさを持つことができた。これまで、「命は大事だよ」と私が声を掛けるだけでは見られなかった子どもたちの様子に、すごいなぁ！と、とても嬉しく思った。あらためて、「感じる心」は子どもたちの中にあり、それを動かし自分たちで考え行動する、「科学する心」の育ちを感じることが出来た。

そしてこれら一連の心の動きは、今後も目まぐるしく変化する環境の中、子どもたちが様々なことを経験し成長していくうえで、とても大切だと考えた。自分たちが暮らす環境を守り持続させる、という課題や目標が重要視される今、そのための約束事や知識を得るだけで子どもたちが理解することはとても難しいように思える。しかしこの実践を通し、子どもたちが「感じる・知りたい・また会いたい」という心を持ち、「続ける優しさ」へつなげたことは、子どもたちが身の回りの環境について考え、続けようと関わっていく姿として実感することができ、私にとって大きな学びとなった。これからもこの経験を生かし、乳幼児期の育ちに大きく関わる保育者として、子どもたちと一緒に感じる心を磨きながら、成長を支えていきたい。

7．最後に

論文を執筆するにあたり、子どもが興味を深められる遊びのヒントをくれた大阪市立自然史博物館、高槻市立自然博物館あくあぴあ芥川の方々、ならびに、ともに考える仲間として、悩みに寄り添い明るく応援してくれた、「科学する心」ネットワークで出会った方々に心から感謝し、これからも学びと交流を深めていきたい。

研究代表者・執筆者　　富田　直子
研究同人　山口　歩、谷口　千恵美